

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 18 日現在

機関番号： 34415
 研究種目： 基盤研究 (C)
 研究期間： 2010 ～ 2012
 課題番号： 22500230
 研究課題名 (和文) 情報爆発時代の観光情報学

研究課題名 (英文) Tourism Informatics in the Era of Information Explosion

研究代表者 井出 明

(Akira Ide)

追手門学院大学・経営学部・准教授

研究者番号： 80341585

研究成果の概要 (和文)：

本研究は、高度情報化社会を念頭に置き、観光情報がどのように流通していくのかという観点からの分析を試みるものであった。追加採択として研究を開始した 4 ヶ月後に東日本大震災が起きてしまい、観光情報流通に関する従来の予想モデルが使えなくなるという困難に見舞われた。但し、人類の悲しみをたどるダークツーリズムに関する観光情報の流通という点では、新たな研究を展開することが出来、思いもよらない成果があがっている。

研究成果の概要 (英文)：

This research analyzes information fluency with regard to tourism in the context of an advanced information-oriented society. However, four months into the research, the Great East Japan Earthquake occurred. As a result, it is impossible to use an assumed model. However, the research has uncovered a new type of tourism—dark tourism—which involves visiting sites associated with tragedy or disaster. Information fluency with regard to dark tourism is new aspect of tourism informatics, and this aspect is detailed in this research.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010 年度	1200,000	360,000	1560,000
2011 年度	700,000	210,000	910,000
2012 年度	700,000	210,000	910,000
総計	2600,000	780,000	3380,000

研究分野： 人文・社会情報学

科研費の分科・細目：情報学 人文・社会情報学

キーワード： 社会情報学 観光 ダークツーリズム

1. 研究開始当初の背景

高度情報化社会の進展に伴い、これまでのマスメディア中心の情報流通から、インターネットが取って代わろうとしている。また、媒体としても、紙から電子媒体への変化の流れは止めることが出来ない。このような状況

は、観光シーンにも大きな影響を与えている。これまでテレビなどのマスメディア、そして旅行雑誌や代理店のアドバイスを観光行動の拠り所にしてきた人々は、インターネットで情報を手に入れるようになるであろうし、インターネットがその行動の決定に大きな

役割を果たすようになるであろう。特に、近年強調されている、「情報爆発」と呼ばれる巨大な量の情報の中から、ビジターがどのように情報を取捨選択していくのかという点については、これまで体系的な研究が殆ど無かった。本研究では、このような社会的背景も踏まえ、「情報爆発時代の観光情報学」と銘打ち、高度情報化社会における観光と情報のあり方について考察を試みることにした。

2. 研究の目的

観光の意思決定や観光シーンにおいて、情報が非常に重要な役割を果たすことは多くの研究者が認めている。しかし、情報が具体的にどのように流通し、いつ、どこで意思決定の参考にされるのかという点については、体系的考察がない。今回の研究テーマは、このような未踏の領域に踏み込み、答えを探ろうとする野心的なものであったと考えている。

また、スマートフォンを始めとする、モバイルデバイスの普及は急速に観光シーンを変えることが予想されたが、具体的にどのような影響をあたえるのかという点については、研究開始時点では明確な予測が立っておらず、モバイル端末の観光への影響も本研究の射程の範囲であった。

3. 研究の方法

当初予定していた研究方法は、企業を始めとして、WEB ページ（いわゆる日本語でいうところのホームページ）における情報発信を研究の対象にしており、補助的に個人のブログや WEB ページ等も参照するという手法であった。

ところが、追加採択であった本課題の研究開始後4ヶ月目にして、東日本大震災が発生するという突発事態が生じてしまった。東日本大震災後は、企業や自治体発信の観光情報も激減してしまうという状況が出現してしまった。また、観光客の動きも非常に鈍くなり、震災と関係のない沖縄方面の旅行客も激減するなどして、やむを得ず研究方針を一部変更することにした。具体的には、2年目の途中から、SNS（ソーシャルネットワークサービス）における観光情報流通の実態を調べる方向に力点を変えてみた。手法としては、研究代表者、および共同研究者が Facebook や Twitter のアカウントを取得し、SNS での観光情報の発信や流通を調べることとなった。同時に東日本大震災の被災地に出向き観光情報の発信の状況を聞き取り調査により把握した。

4. 研究成果

本研究課題は追加採択であったため、初年度は11月から研究を開始した。

当初予定していた研究方法が使えなくなったため、研究の完成が危ぶまれたが、SNS を軸とした観光に関する情報流通の流れに関して、一応の発見はなされたのではないかと考えている。

従来の観光情報は、「どこに行くか」という論点がメインであり、それに付随して、「何を食べるか」や「何を見るか」という情報が流れていた。ユーザーによる評価情報も存在するものの、その多くは匿名化されたものであった。それ故、ユーザー評価を選択の参考にしようとしても、評価と個人のニーズとの乖離もしばしば指摘されていた。しかし、SNS ベースでの観光情報発信は、誰が情報を発信しているのかという送り手側の情報が明示されるため、受け手側は自分の感性に近い人の観光体験を参考にできるといったメリットを有しているといえる。従来は、他者の行動を参考にするといっても、マスメディアが流すいわゆる“オピニオンリーダー”のライフスタイルに一般人が憧れるというパターンが多かったが、SNS ベースでは、まさに、自分の仲間の観光行動が時系列で報告されるため、親近感に根ざした旅へのあこがれを持つことになる。つまり、もはや、「どこに行くか」は問題ではなく、「誰が行くか」が主要な論点であることがわかる。

また、SNS ベースでの観光情報流通は、モバイル端末による現地からのリアルタイムの情報発信が非常に多いということも判明した。つまり、ツイッターにおいて、場所を明言しながらなされる「XXX なー」や Facebook のチェックインの機能は、まさにその典型である。特にスマートフォンには、これらの SNS のネイティブアプリが搭載される例も多く、旅をしながらストレスなく情報発信が可能になっていることも、情報の発信及び流通量の増加（＝いわゆる“情報爆発”）の状態を生み出しているといえる。

さらに、東日本大震災発生後、いわゆる「ダークツーリズム」的な、観光情報が WEB ページにも多く登場するようになった。ダークツーリズムとは、災害や戦争を始めとする人類の負の歴史を辿る旅であるが、この観光形態が日本に根づく可能性を感じることができた。

被災地に関連した観光情報は、イベントに関わるものである場合は、大手旅行代理店などの WEB ページで広報がなされるが、個人的に被災地を訪れ、悼みを捧げるというタイプの旅の場合、ブログや SNS で発信されることが非常に多い。特に、先述の場所と連動した SNS での情報発信は、その地域が固有に有する悲しみと深く結合しており、そこから発せられる情報は、他者の心を揺さぶる。

その情報が、さらに他者へと伝達され、彼らの旅へのモチベーションを一層高め、「悼む旅」としてのダークツーリズムが広く展開していく。今回の被災地への視察を通じて、ダークツーリズムの可能性を強く感じることができた。

近年、若者の旅行離れが指摘されるようになって久しいが、ダークツーリズムという旅の体験であれば、若者の琴線に触れる可能性があり、新しい旅のカテゴリーとして確立するのではないかと考えている。

今後の研究の可能性としては、SNS という極めてパーソナルで人格に根ざした情報の発信形態が、観光という営みにどのように関わっていくのかという観点からの考察が必要になってくるであろうと考えられる。その際、従来の観光と異なる極めて個人的な体験であるダークツーリズムの観点は、今後の観光と情報の相互関係を理解するための鍵となるであろう。その意味で、今後東日本大震災の被災地域の観光情報のあり方について研究を進めて行く必要がある。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 14 件)

- ① 井出明、日本型ダークツーリズムの可能性－戦争・災害・環境の視点から－、第4回観光余暇・関係諸学会共同大会 学術論文集、第4巻、査読あり、2013、pp9-15
- ② 麻生憲一、集落限界化プロセスと過疎対策－奈良県過疎地域集落实態調査に基づいて－、地域デザイン学会誌地域デザイン、第1号、査読なし、2013、pp17-32
- ③ 麻生憲一、「市民参加」と協働のまちづくりに関する一考察、奈良県立大学研究季報、23巻3号、査読無し、2013、pp35-47
- ④ 津田康英・麻生憲一、「道の駅」における登録と機能の広がり、奈良県立大学研究季報、23巻4号、査読なし、2013、掲載予定
- ⑥ 井出明、ダークツーリズムと地域イノベーション、進化経済学会論集第17、査読なし、2013、Paper-ID B1-1
- ⑦ 井出明、悼む旅としてのダークツーリズム、日本観光研究学会第27回全国大会学術論文集、査読あり、2012、pp.169-172
- ⑧ AKIRA IDE, Future Tourism in Hokkaido with a Comparison to Current Tourism in Okinawa, Evolutionary and Institutional Economics Review , 査読あり, Vol. 9, 2012, pp101-111
- ⑨ 井出明、東日本大震災における東北地域の復興と観光について：イノベーションとダ

ークツーリズムを手がかりに、運輸と経済、査読あり、2巻1号、2012、pp.24-33

⑩ 井出明、情報まちづくり論から見た図書館の役割、情報処理学会人文科学とコンピュータ CH-96、査読なし、2012、PaperID-5

⑪ 井出明、日本におけるダークツーリズム研究の可能性、進化経済学会論集、査読なし、16巻、2012、PaperID-5

⑫ 井出明、情報まちづくり論の試み、情報処理学会 電子化・知的財産社会基盤研究会 EIP-55、査読なし、2012、PaperID-8

⑬ 田中良典・井出明、テキストマイニングによる若者の観光需要の推定－大学生のライフスタイルに着目して－、情報処理学会人文科学とコンピュータ CH90、査読なし、2011、PaperID10

⑭ 井出明、地域の進化と観光進化経済学会論集15、査読なし、2011、PaperID C3-1

[学会発表] (計 8 件)

1. 麻生憲一「過疎地域における道の駅の経済効果－奈良県を事例として」日本観光学会中部支部、2013
2. 井出明「自然災害とダークツーリズム」地域安全学会一般、2012
3. 井出明「東アジアにおけるダークツーリズム研究の課題」東北アジア観光学会 全州学術大会、2012
4. 井出明「東日本大震災とダークツーリズム」地域安全学会いわきワークショップ、2012
5. 麻生憲一「過疎集落の現状と対策－奈良県過疎地域集落实態調査に基づいて－」地域デザイン学会、2012
6. 麻生憲一「旅行取引額と市場分析」観光経済経営研究会、2011
7. 井出明「海外観光地における被災者に対する記憶のゆくたて－イントロ洋津波における邦人の慰霊を手がかりに」地域安全学会一般講演、2011
8. 麻生憲一「日本の観光経済学研究の動向」観光経済経営研究会、2011

[図書] (計 4 件)

1. 井出明他、グローバリズムと地域経済、日本評論社、第9章、2012
2. 麻生憲一、他、日本の空港と国際観光・愛知大学経営総合科学研究所叢書36、愛知大学、pp.79-88、2011
3. 麻生憲一、他、観光研究レファレンスデータベース、ナカニシヤ出版、pp.30-41、2011
4. 麻生憲一、他、よくわかる観光社会学、ミネルヴァ書房、pp.120-121、2011

6. 研究組織

- (1) 研究代表者 井出明
(Akira Ide)

追手門学院大学・経営学部・准教授
研究者番号：80341585

(2)研究分担者 麻生 憲一
(Ken-ichi Asoh)
奈良県立大学・地域創造学部・教授
研究者番号：90248633